【286】

氏　名（本籍）	鈴木伸隆（愛知県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2032　号
学位授与年月日	平成 16 年 4 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フィリピン・ミンダナオ島南コタバト州開拓村におけるイロンゴ系入植者の生活世界形成と文化創出に関する文化人類学的研究

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	小野澤　正　喜
副　査	筑波大学教授	文学博士	今　井　雅　晴
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古　家　信　平
副　査	筑波大学教授	博士（社会学）	駒　井　　洋
副　査	駒澤女子大学教授	文学博士	牛　島　　巖

論　文　の　内　容　の　要　旨

本研究は，フィリピン・ミンダナオ島南コタバト州に入植したイロンゴ系キリスト教住民の開拓村を対象として，1992 年 2 月より 1998 年 9 月までの総計 27 ヶ月の現地調査で得た一次資料と文献資料に基づき，入植者の生活世界と創出される文化について論じたものである。

論文は「開拓村形成をめぐる歴史的展開」と「開拓村における日常実践」の 2 部構成で，序章，1 章から 7 章，および終章の全 9 章からなっている。

序章では，研究の目的と課題，研究の枠組と先行研究，調査方法，および論文構成について述べられている。

1 章「フロンティアとしてのミンダナオ島」では，1898 年から始まる米国による植民地的状況下で，フィリピン・ミンダナオ島がフロンティアとして認識され，位置付けられる歴史的な過程を論じている。豊富な資源ゆえにフィリピン経済発展の礎になることを期待されたミンダナオ島が，植民地政府である米国の政治的，経済的，社会的な関心から，入植者であるキリスト教徒と先住者であるイスラーム教徒との民族同化と経済開発の一大実験地へと転換させられる過程を明かにしている。

2 章「開拓村概観」では，調査地の歴史的背景，人口変動，民族構成，地理的特徴，経済活動等の資料が提示されている。調査地が位置するミンダナオ島南コタバト州の開拓村ノララは，1941 年に国家入植事業団による組織的な入植事業の一環として設立された開拓村である。1951 年にはノララ町として独立し，1990 年の時点で人口 35,566 人，世帯数は 6,407 を数えるまでになった。1970 年以降に導入された灌漑設備や高収量品種導入を契機として，ノララ町において，商業的な経済活動が活発化し社会階層化が進んだこと，先住者であったイスラーム教徒の比重が低下していく過程が分析されている。

3 章「新しい開拓空間の創出」では，調査地および入植者の故郷であるパナイ島における地名と空間構成を手がかりにして，入植者の開拓村における象徴的空間認識のあり方に着目している。調査地において，地名や景観は植民地支配を記憶する歴史的な媒体ではなく，近代的な発展のシンボルとして認識される。同じように見える地名や空間構成であっても，故郷と開拓村ではその意味内容に大きな差異が見られる。その一

方で，精神世界における大伝統としてのカトリシズムの存在，教会の中心性には普遍的な特徴が見られるなどの，開拓村の固有性が分析されている。

4章「入植をめぐる個人の経験」では，開拓村に入植した第一世代に注目し，彼らの歴史的な経験を故郷パナイ島での生活状況，入植過程，定着過程の三つに分けて議論している。入植者は故郷における経済的構造変化への対応策として移住を選択し，入植後は経済的な不安の回避を目的としたネットワークを故郷との間に形成する。その一方で先住者イスラーム教徒との協力関係も促進するという独自の展開を見せている。しかし，政治的同化の象徴とみなされた入植者の先住者との協力関係も，生存戦略のための政治的な妥協の産物にすぎないことが分析されている。

5章「入植者のアイデンティティ形成」では，入植者にみる固有のアイデンティティ形成について，町の中での二つ異なるレベルの祭の実践事例から分析している。開拓村にみられる祭の形態は，故郷パナイ島での宗教的実践と極めて酷似している。しかしながら，文化的な多様性を内包する入植者という特殊性ゆえに，祭本来の宗教性は捨象されている。その代わりに，入植者同士の社会的な紐帯が強化される場として，機能している点が分析されている。

6章「学校教育が保証する近代性」は，近代学校教育が経済性のみではなく，象徴的な価値ゆえに選好される理由とその実践について分析している。今日国家のなかで周縁に置かれつつあるミンダナオ島の開拓村において，英語に代表されるような近代学校教育が受容される理由は，都市的洗練や近代的な価値にある。学校によって習得できる洗練されたスタイルと都市的なセンスを身につけることは，他者と差異化する上で極めて重要である。労働市場において大学卒業者が就職難に直面する状況下で，依然学校教育が「消えてなくならない」投資先として熱望される背景には，文化資本としての価値がますます注目されているという周縁地域特有の状況が明かにされている。

7章「歴史表象の中の開拓村」では，開拓村の誕生，発展，成熟という一連の歴史的過程が，地方史にどのような語彙と形式によって表現されるのか議論している。地方史にみる歴史記述は，いずれも入植者の立場から記述されたものばかりであり,「われわれの歴史」という性格を帯びている。とくに先住者である「かれら」イスラーム教徒は過去の時代を生きる存在として描かれ，入植者との同時代性は否定されている。こうした他者存在を否定しようとする背後には，入植という行為をキリストの受難になぞらえ，自らを近代的な存在として位置付け，さらに自らの存在を正当化しようとする入植者固有の政治的なイデオロギーが成立しているという実態の解明がなされている。

終章では，入植というローカルでミクロな経験を，フロンティアの誕生と発展という重層的な過程の中に位置付け，そのダイナミズムを入植者の意味付けという，より普遍的な視点から分析している。その結果，次のような解明結果の提示を行っている。開拓村の誕生，発展，成熟という一連の過程は，国家という大きな支配メカニズムの中での変動と不可分に連動しており，それに伴い開拓村の社会が階層化の過程を辿っている。こうした政治経済的状況下で，文化的な多様性を有する入植者は，新しい社会秩序形成のために，協力や相互扶助を重視する固有の実践様式を成立させていることを解明している。その一方で，遡るべき過去が存在しないがゆえに，過去を表象する存在が文化的な資源としての象徴的な価値を持つメカニズムが，開拓村に共通の現象として結論づけられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，長期にわたる文化人類学的現地調査を基礎にして得られた資料にもとづき，フィリピンの開拓村における生活世界と文化的動態について詳細な論考を行った成果である。著者は，従来のフィリピン研究の中では等閑視されていた開拓村の実態の分析を行い，多くの面で研究上の新境地を切り拓いている。

本論文が移民集団研究，開拓村研究にかかわる人類学研究においてなした貢献は以下の諸点にある。

1．移民集団が先住集団との関係でおこなう相互的な文化的同化，境界領域の更新を含む共存のパターン，文化集団間の階層化の構築等の研究において新たな知見を提示していること。

2．開拓村の移住集団が母村との関係で構成しているネットワークがもつ経済的機能およびアイデンティティ維持において果たしている機能等につき斬新な解明を行っていること。

3．近年の人類学上の新領域となっている住民の日常世界の構成に関する意欲的な記述を行い，一定の成功を収めていること。とりわけ，地名に関わる意味付けのあり様に関する記述と分析は評価される。

4．移住集団が生存戦略の展開の中で行っている，様々な文化的資産の操作に関するユニークな分析とモデル提示は高く評価される。

上記のような研究上の貢献がある一方，以下のような課題を今後に残している点が指摘できる。

1．本論文がめざした現地社会の日常世界の構成に関する記述と民族誌のあり方に関わる問題提起は今後のより綿密な現地調査を通して全面展開されることが期待されること。

2．周辺の開拓村で生じた社会変化をフィリピン社会のトータルな変化との関係で包括的に把握するために，社会構成の多層的なレベルの資料と言説により補強していくことが望まれること。

本論文は，上記のような残された課題はあるが，長期にわたる現地調査に基づき重厚な民族誌記述を行い，理論的な論考を行った作品として十分独創性があり，学界に一つの地歩を占めうるものと認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。